

461

金光教の運命

『時事研究社』

危機に瀕す?

特250

365

ま・ひろし著

定價十錢



始



特250
365



をしま・ひろし著

危機に瀕す?

金光の運命

發行時事研究社



吾社の言葉

★わが時事研究社は都下言論界の第一線に激濁たる活動を續けつゝある新鋭ジャーナリストを以て構成してゐます。

★従つて本社發行になる刊行物は徒らに時事を糊塗せんがための一夜づくりの流行パンフレットとは自ら異り、事件の渦中に活躍し身を以つて體驗してゐるジャーナリストの良心的なる真相報告書であることを御承知下さい。

前著發禁

讀者へお詫び

本社が前回刊行いたしました「を」しま・ひろし」著「永田事件の真相」は内容全部が當局の忌諱する處となり、發賣禁止を命ぜられました。爲に節角御期待下さいました讀者皆様の御満足が願へませんでした。

本社と致しましては極めて遺憾ですが右様次第ですから、何卒御赦し下さいませ。

時事研究社

著者の言葉

軍政評論と政治評論と、僅かに趣味的に研究して居ります民論研究の他に、筆を總体に探つたことのない私が、なぜ宗教批判に筆を染めたか、恐らく、私を知られる讀者の多くは、御不審に想はれるでせう。私は、中學生活を、金光教が設立してゐる金光中學校で過す恩恵をうけた一人です。しかし、その卒業生であるからと言つて、今度の金光教内紛事件が正しい出発点から惹起されたものであれば、何ぞ容喩しませう。

ところが、今度の内紛事件の一切は、悉く不純な動機から出發し、非人道的な経路を辿つて來たものです。私達の恩師は兩派に岐れ主義を異にしてゐます。情けに於て一方に加擔する事は忍びませぬが、義を憶ひ理を憶ふ時、男子たるもの決然唯一の進路に就かざるを得ません。管長排斥派に依つて悪宣傳されたやうな、管長が横暴であると言ふ證據は少しもありません。管長排斥派の言ふところでは、その管長が横暴なのだそうす。管長を排斥するためには、管長が横暴でなくても、横暴だと言はねばならないのだそうす。

若し、眞に世に流布された如く、管長が横暴であるならば、私は血涙を以て管長を諫め、教子たるの道を盡したでせう。公平に見て、管長を諫止しなければならぬ理由と事實は毛頭だに見あたりません。

管長は、金光中學校の校主です。校主が、一部教團内の倭奸な人々に依つて、斯ふ言ふやうに迫害され、しかも管長として隠忍自重されてゐるのを見て、等しく教恩に接した金光中學同窓三千の吾々が、どうして黙視して居られますか………。

私は各方面に亘つて約三ヶ月半、材料を蒐めました。しかし、その材料の九割九分九厘までは、凡て管長が正しい人であり、副管長を主體とする管長排斥派が正しくない人であると言ふ結論が生まれました。尙、本書刊行は全く私の微力なる財政から生れ出でた自費出版であります。將來、或は起るかも知れぬ誤解のために、こゝに宣明いたしてをさます。二十六歳の白面の一評論家が、恩師なればこそ管長の名譽のため、まづ聖戦の第一石を投じたのです。

第二石、第三石は覺悟してゐます。利益は望んでゐません。微力ながら此の計劃に依つて、一般社會人を誤またしてゐる管長排斥派の捏造宣傳が、不正義、非人道的なものであつたと言ふ認識に代れば結構です。

本稿に躍る人士も、派の何れたるを問はず、筆者筆陣の眞意が金光教を憂ふの一字につきることを御諒承願ひたい。最後に、本書執筆に當り、材料提供に御努力下さいました關係當局その他に甚深の敬意を表して己みませぬ。

昭和十一年四月

三十九度の熱と戦ひつゝ熱海にて

著者識

先づ「まへがき」から

金光教を知らないと言ふ方があるかも知れん。そんな方のためと、金光教を知りながらも今次の金光教のお家騒動を充分知らないと言ふ方と、そしてお家騒動を知りながらも正解に達しない方のために、詳しいことは後でユツクリ述べるとして、本書を読んで下さるに不便のない程度、先づ金光教の命とり「お家騒動」に就いて概略を述べねばならぬ。「お家騒動」に關して充分正解してゐられる讀者も、復習の意味で一應眼を通して貰ひたいものぢや。

戦期

前哨戦は 昭和九年の二月に始つたが實戦は越へて昭和拾年の一月から同年四月に亘つて展開された。

餘戦は實戦終焉の昭和十年四月から昭和十一年三月迄に亘つてゐるが、是に

は兩軍共に主力部隊は出動して居らぬ。しかし、表面ともに主力部隊の動員はないが、裏面では主力部隊の衝突が頻々としてあつた。

管長軍。管長の金光家邦君を擁護せんとする一派にして、兵力は誠に寡少。兵員

戦闘部隊

叛亂軍
〔副管長軍〕

は全教會千二百中僅に八十教會を有するに過ぎぬ。

副管長金光攝胤君の管長乗つ取り野望を遂げんとする一派で、兵員は全教會千二百中千教會を動員してゐるが、是は戰勝を夢見て利益提供の約の許に集めたもので實戦力は薄弱。但し此の軍には生神と言ふ猛烈な近代戰闘機があり、一時は優勢を誇つた。

戰闘目標

管長軍

防戦たゞ一つ。

叛亂軍
〔副管長軍〕

管長金光家邦君を追ひ出し、自軍統領副管長金光攝胤君を是に充てんとす。更に従來管長及び副管長兩家にて分配のサイセンの均等を企つ。

戰闘武器

管長軍

一、沈黙・自重

一、金光教規の確守

一、金光中學校友正義有志團

一、將校 金光教幹部二割の参加

一、兵員 八〇教會

叛亂軍

一、空軍 生神（副管長金光攝胤君をいふ）戰闘機

一、金力に依る宣傳戰

一、將校 金光教幹部八割の参加

一、兵員 一〇〇〇教會

一、身分訴訟（裁判）

一、金光中學校友不正義有志團

管長軍

兵力彈藥の寡少と叛亂軍の猛烈な捏造宣傳に、頭初は苦戦なるも時を迎へて正義戰の強味が現はれ好戰。

叛亂軍

最初は實に優勢、金力に依る宣傳戰の猛威夥だしいものがあつたが、金力なるがため精神的な迫力がなく、殊に兵員は烏合部隊で闘志あたかも支那軍の如く、退くを知つて進むを知らず、昭和十一年三月の身分訴訟戰の如きは空前の慘敗

戰闘結果

叛亂軍の零敗。

これが、昭和九年の二月から過ぐる三月に迄亘つた金光教お家騒動大戦の概要ぢや。しかし、是を以て金光教内の騒動が終焉をしたと見るは早計ぢや。寧ろ此の戦争は第一期戦で、清掃を呼ぶ管長軍と、更に戦術を變へた叛亂軍（副管長軍）の一戦、即ち第二期戦が極く近い未來に待ち構へるものぢやと、愚老は觀とる。

金光教お家騒動の真相

叛亂の烽火は如何にして擧げられたか

人が住んでる家に乗ッ取るのは相當骨が折れる。いま乗つ取らうと思ふからお前は出るなど、言ふ間の抜けた奴もゐないが、「はい、出ます」と言ふ馬鹿も居らん。管長の椅子を乗ッ取るんで左様で、其處に管長を追い出すだけの表題がつかんと、管長を追い出されん。副管長軍（以降叛亂軍と呼ぶ）はその理由に腐心しとつた。さて、如何に管長排撃の名目ばかり出来上つても、ものには時期と言ふものがある。晝日中に電氣を灯けても明るう無い。昔から良く言ふた様に、何か

遣らうと思ふには先づ「天の時、地の利、人の和」を描へることが肝要ぢや。叛亂軍は頻りにその天の時と言ふ奴を狙ふたのぢや。

ところが、待ちに待つた時期が叛亂軍の上に訪れたのぢや。生神を中心に荷ぎ出した叛亂軍もこの時を中心に捲き起された大戦が斯くも惨めに敗戦の結果を生むだらうとは、夢にも想はなかつたと見える。「アテにならぬ生神ぢやと言ふのか……」ハハハ……。

やがて、必ずや管長の椅子を掌中に收め、金光教の實権を双手に總攬せんと野望してゐた副管長一派の雀躍する時が訪れた。昭和九年の夏のことぢや、話をする上に便利ぢやから茲に金光教本部の組織を掲げやう。





その昭和九年の夏副管長派を中心とする金光教議會（別圖参照）は、

一、副管長金光攝胤君の神前奉仕四十年の表彰式と言ふものを可決した。攝胤君が生神として神前に四十年も働いてゐるのでそれを表彰しやうと言ふのが表面のこと、是を「御禮の會」と名附けた。裏面では、名は體を現はすとか御禮するなら言葉だけでよい筈だが、いくら生神でも言葉よ

り金で禮を言ふて貰ふた方が、徹がいゝと見える。その實、この御禮の會は一般信徒から募財し攝胤君に與へるのが目的で、その見積金高は實に二十五萬圓と言ふ巨額だった。ところが是が一部で非難され始めた。金光教では今日と言ふ日まで天理教式の募金は一切やらなかつたのちや、強制的な募金は金光教の慣行精神に反するのちや。一部で罵々の非難が二十五萬募金計畫に擧げられたのは理の當然ぢや。この非難に狼狽した副管長派は「お禮の會」を「お禮信行會」と變換し、内容の別個を装ひながら、再び募金の野望を企てんとした。ところが、偶々そのインチキが「黒白評論」或は「國粹新報」に掲げられ、殊に後者に於ては副管長派の管長の椅子乗つ取り陰謀をまで曝露し平常行動の不徳を揚げて痛撃の巨弾を投ずるに至つた。その内容の主なるものは、次のやうなものである。（註 此項は不副長派の小林鎮、古川隼人その他四君の合著になる「本教に於ける不祥事件の真相と其の経緯」中より拜借するもの）

一、大伏魔殿金光教は蛇蝎の集團、生神様「御禮の會」をダシに、信者から二十五萬圓を捲きあげんとす。

一、副管長金光攝胤と宿老佐藤範雄一味の惡黨を信徒は排撃。

一、副管長金光攝胤一味發起、劇場建築を口實に信者から七万五千圓詐取。

(筆者註 攝胤一味とあるは攝胤君の外戚藤井某を言ふ(特に秘名)資本金二十萬圓を以て金光俱樂部劇場株式會社を設立せんとし、全國教會より募債したが事業に着手するに至らぬ間に殆ど募債を費消したと言ふ事實がある。今日金光驛前に十年近くも建築敷地の標識のみが依然と古色のまゝ立つてゐる。)

一、副管長金光攝胤と宿老佐藤範雄一味幹部が西六金光教をダシに金光教別派を造る謀策露見

(下略)

この國粹新報の記事に嗚然しながらも、副管長派はその取材内容が其の特異性から押して必ず管長派から出たものとの確信を抱いて、その出所探査に腐心し始めた、内容が餘りにも適り過ぎてるると見たのぢや。とても新聞記者としての能力と努力だけで、これだけの取材が出来るものぢやないと言ふ副管長派の見込みは、見事適中したのぢや。内容は管長家の使用人から出たことが判つた。管長家の使用人でも、その責任は管長が負はねばならん。假にも副管長家を誹謗する様な管長は、吾々の信任が出来ん。理論も斯う言ふ風に曲然としては、常人間には話が出来ん。

管長は管長、使用人は使用人ぢや。管長が使喚したとか言ふのならば、管長問責も或は聞える。そんな曲論してゐたのぢやあ、管長はいくつ體があつても足りん、そんな事を言つてゐると、此の使用人は人を斬つたと言へば、管長はその責任を負ふて裁判所へ行かねばならぬ理窟になる。その間に次の使用人が徒博で警察へ泊められたら、管長はさて、どつちへ行くのぢや。そんな出駄羅目な責任論は現今日本にはない筈ぢや。ところが、金光教の副管長派に限つて、そうは行かない。やつぱり管長は使用人の責任を負へと言ひ出したのぢや。

昭和九年の八月十四日突如、時の教監小林鎮君は臨時專掌會議を召集し、

一、大祭後の本教進展の根本問題。

一、布教確基の方針。

管長—副管長—教監(首相)
(專掌員數に制限なし)



の二項を極秘に附しつゝ協議し、管長金光家邦君の排斥を提案せんとした。たまく一部専掌中
 議題「本教進展の根本問題」として、その具体策の提出を要望するや小林鎮君は暗に管長不信任
 の聲を洩したのちや。將に晴天の霹靂ぢや。俄然靜寂なる會場は騒然を呼び、提案の餘りにも無
 暴、非常識が轉じて騒々の非難となると、席上管長不信任を呼號した教監小林鎮、専掌古川隼人
 佐藤一夫、白神新一郎、畑一の各君は提案の容れられぬ事を知り、忽々の裡に席を蹴つて退い
 た。この日缺席してゐた近藤明道君を加へて、この小林君以下が後日、叛亂軍（副管長軍）の中
 堅として活躍するに到るのちや。

陸軍省つはもの編輯長
 陸軍歩兵少佐 大久保弘一著
 菊版百五十頁 定價五十錢（送料六錢）
日本精神信解
 「附」天地創成と日本建國の由來
 二・二六事件の眞只中に兵に告
 ぐの名文を執筆し、叛亂鎮壓に
 名聲を博した人こそ、誰であらう
 我が大久保少佐その人です。
 （全國新聞掲載）

東京市麴町區飯田町一丁目二十三番地 時事研究社

教 監	專 掌	期 間
小林 鎮	金光文孝、今田周吉、片岡次郎、白神新一郎、佐藤一夫、近藤明道、古川隼人、畑一	昭和九年十二月二十二日辭職
阪井 永治	濱田幾治郎、今田周吉、片島幸吉、畑一	昭和九年十一月二十六日發令 昭和十年一月十七日辭職
金光 文孝	金光義忠、吉永甚太郎、宮本嘉一郎、松井達、多田礎次郎	昭和十年二月十七日發令 昭和十年四月二十五日辭職
高橋 正雄	小林鎮、和泉乙三、關口釣一、畑一 （専掌發 令ハ昭和十年八月二十九日）	昭和十年四月二十五日發令 今日ニ至ル

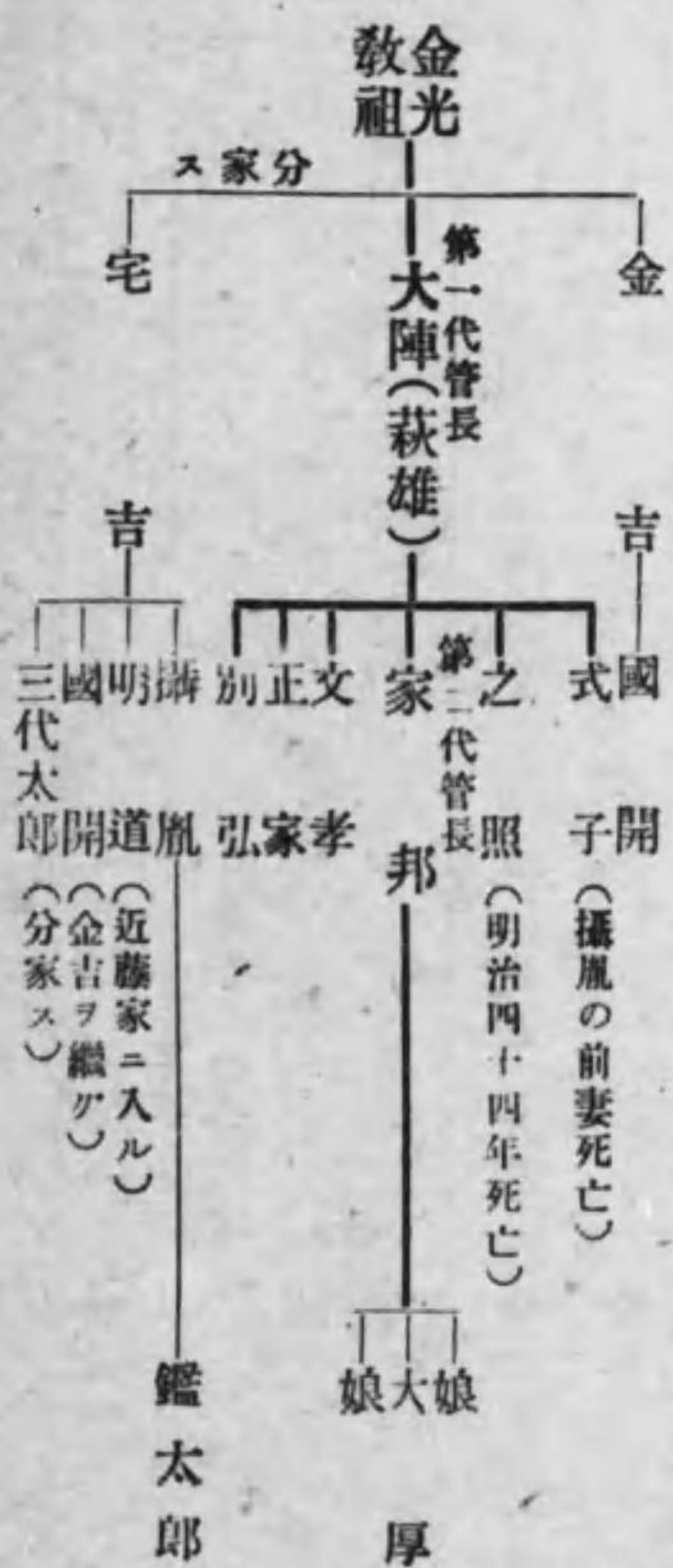
文部省調査・（備考）
 人名中太字は管長派、細字は副管長派

理不盡限りない副管長

續金光教お家騒動の真相

管長家邦君の資産が四百万圓、副管長攝胤君の財産が六百万圓と世の中では評判しとるが、まさか、それほどもあるまい。しかし、話半分にしても相當なものぢや。この財産を繞つても、管長と副管長の間には相當面白い物語がある。まあ、それは後へ譲るとして、茲で、どうし

金光家圖



ても見逃すことの出来んのは、攝胤君の生ひたちぢや。攝胤君が今日を築くに至つた前半生史ぢや。

攝胤君の親爺宅吉は、攝胤君と同じやうに第一世管長大陣のもとで、永い間神前奉仕をいつてゐたが、是の人は仲々人物が出来とつた。親に似ぬ兒が出来ると言ふ、攝胤君がそれでなければ幸ぢやが。ところが！不幸神前奉仕の半ばにして宅吉は死んだ、どんな偉い人間でも壽命には勝てん。そこで、管長大陣が、どうも、宅吉の亡き後に神前奉仕の勤まるやうな立派な人物が居らん。それ故に致し方がない、自分自ら神前奉仕をも併せてやらう！、と決意したのぢや。ところが、白神新一郎(いまの新一郎君の養父、攝胤君の實妹の實父)と近藤藤守(攝胤君の實弟明道の養父)の二人が、どうしても、一人が二つをするのは無理ぢやと言ふて、専任を置けと聽かぬ。

「それならば、一體その専任に誰を据へればいゝのだ」と質したら、

「攝胤を用ひて下さい」

と言ふ。攝胤君は餘り人間はシツカリしとらん。しかし、その親爺の宅吉は實に良う神の前に奉仕した。死んだ宅吉に感謝する意味で、大陣は攝胤君の奉仕繼續を許した、茲に始めて攝胤君は今日の神前奉仕が出来るやうになつたのちや。彼の今日あるを憶へば、既に亡き人の大陣は勿論のこと、その兒家邦君にさへ、足は向けて寝られぬ筈ぢやが喃。道義地に陥ちんとする現代日本の風雲に乗つて、攝胤君が恩主に破徳、破道の逆心を放つたことはいや、泣いても泣き切れぬ程、遺憾極まりない事ぢや喃。

攝胤君を盛り立てるにマンマと成功した白神新一郎と近藤藤守は、更に攝胤君の分家案を大陣に提唱した。大陣は、攝胤君ならずともその父宅吉に分産分家させる積りであつたから、事更らこれを否まなかつた。

「分家するについては財産が要ります。どれほどお與へになりますか。」
と胸に一もつも二もつもある二人が、その答を求めぬ。

「お母（教祖夫人）さんの仰言つてゐたとほり、本家に六分、分家に四分、それが適當ではないか。」

と大陣が答へると、二人は、

「いや、節角のお言葉ですが、賛成し兼ねます。貴方ともあらうお方が、たつた一人の弟を分家なさるに、不公平に四分六となさつたのでは、いまはさて、後々の人の笑ひ種になります」

「と言ふと、一体どうせよと言ふのか……。」

「五分々にお分けになるのが一番宜しいと思ひます。」

二人は五分論を主張して止まぬのちや。分家をすると言ふて、五分々に財産分配するやうな家は極く稀ぢや。その稀なことをさへ、第一世管長大陣は、攝胤君のために嫌だと言はなかつた。この頃の、この事を胸に再び想ひ起すことの出来る胤攝君であれば、亡き人となつてゐる大陣はもとより、その兒家邦管長にさへ、反逆どころか、足さへ向けては寝られぬ筈ぢやが喃。あゝ人道廢れ、徳義潰ゆも、茲に到ればその極ぢや。

それから言ひ加へて置かねばならぬが、その第一世大陣は三人兄弟の眞中ッ兒だつたのちや。兄は家を捨て、武士となつた。それ故に金光家の業は二男の大陣が繼ぐことになつた。そして、それから後々金光家の業は大陣の子孫（金光本家）が繼承することに、金光教憲法たる金光教規に

依つて定められてゐる。

彼等副管長派が眞に金光教を憂ひ、若し家邦君を以て管長に尙足らずとするならば、何も金光教憲法たる金光教規を蹂躪し金光本家管長世襲制を破壊する、分家攝胤君の管長説を出さなくてもいゝ筈である。本家に、代つて管長たらんとする人のない故ならば、或は又、その言ひ分も通るだらうが、本家に現管長家邦君の息もれば、文孝など、言ふ賢弟もゐる筈ぢや。これを以ても今度の叛亂軍の軍事目的は、管長の椅子乗取りの一事に盡きることが、よく判るぢやらう。

騒動戦は宛然労働爭議の型体

續金光教お家騒動の真相

いよく陣容完備した副管長軍では、遂にその一味の小林鎮君が、尙教監として金光教本部の最重位にあるのを奇貨として、茲に昭和九年の十月下旬部長會議をその職權によつて召集したのぢや。昔にはようあつたらう。御用十手を持った田舎の親分が、十手の風で娘を拐はしたりしたなどと言ふことが、……管長排斥のために、管長下の者が管長から與へられた職權を以て部長

會議を召集するなどと、全く以て怪しからぬ。怪しからぬどころの話ではなくて、まる切り戸駐録目ぢや、部長會議の議題は、

一、國粹新報事件

一、金光教本殿造營問題

の二つぢや。この席上、副管長派の小林鎮、古川隼人の兩君は上記二件の上提をなし兩件に對する家邦管長の不誠意を難詰した、筋組みは定まつとる。つづいて、

管長の辭職を進言すべきか、否か……。

と万場に諮つた。『そのとき、管長の進退どころか進退の必要なのは、お前小林君ぢや』と誰かと言ふたそうぢやが、面白い事を言ふものも居るものぢや、しかし、誰も斯んな的外づれの理由で管長辭職を要求しなければ、ならぬなど、夢にも考へとらん。万場噫然としてる仲を、二人は一生懸命説明に努めたと言ふから、當時の光景は丁度竹に木を織いだ芝居のやうだらう。そうだらう、何も本氣で管長に辭職進言など、言ふとるのぢやあない、目的は進言で無うて管長家邦の椅子へ副管長の攝胤を据へやうとする排斥の點にあるのぢやから聞いてゐる方では、どうも合

點が行かん、鳩の豆てつぼうだつたと言ふが至極な談ぢや。

そんな廻り、どくやるより、アツサリ理由抜きの本論といふやつで管長家邦より副管長攝胤が好いと、やれば好かるう、理由でない理由を下手に付けやうとして味噌をつけた。

尤も、この亂棒小林内閣（教監）は間もなく擧げて信徒の騒々たる非難裡に、猫に追はる鼠の如く逃げ失せて終ふた。小林内閣に代つて、金光教本部は阪井内閣の出現を見た。野に下つた小林君が、じつとしてゐる筈がない。自由な立場から直ちに「本教に於ける不祥事件の真相と其の経緯」と言ふ小冊子を出し教内暗闘の暴露を以て、果然金光教平和の攪亂を企てるに至つた。どうも、人間も斯う得手勝手な行動が採れると面白いぢやろう。たつた昨日まで管長のもとの教監職で飯を頂いてゐた、御飯を頂きながら、御主人の悪口を言ひ、辭めれば辭めて御主人の誹謗をやり、教内の平穏を破壊せんとする。斯う言ふ分子の存在する限り、金光教は浮ばれん喃。

最も小林君の行動は、後任阪井教監に依つて「遺憾至極」といふ極印が附された。これに憤怒した小林君一統は、金光教有志聯合機關本部なるものを臨設し、茲に堂々戦端を切つて管長排斥の叛亂の軍を起すに至つた。

叛亂軍の軍行動はあたかも労働爭議の形體を以て進み、殊に情報（レボ）の如きはその形體が夥しく、目下××省方面では當時の騒動戦を密かに監察調査しとるそうぢや。

偽装の各地青年信徒大會

續金光教お家騒動の真相

叛亂軍の行動中、目醒しいもの、一つに各地青年信徒大會と言ふのがある。これは、あたかも金光教の青年信徒大會の如く偽装してゐるが、實体は金光教平和の破壊者叛亂軍（副管長軍）の別動隊に過ぎぬものぢや。この青年信徒大會が全く金光教の主催になるもの、やうに誤解されてゐる人が、今日に尙あるから、その偽装なるインチキに惑溺されないやうに注意しとく。

その證據は、主催者が悉く叛亂軍の關係者に限られ、金光教の主派である管長及び金光教本部關係の者は一人も参加してゐないと言ふ事實を見ても歴然とするぢやろう。即ちその例を二、三擧げて見ると、四月三日（昭和十年）の京都の大會では佐藤範雄の息博敏君が中心となり、四月七日（同）の大阪大會では高橋正雄君が中心となり、同日の東京大會では佐藤金造君の息一徳が

居り、小林鎮君が中心となつとる。と言ふ風に全部が全部この例ぢや。

騒動前は本部直轄下に金光教青年會聯合本部が設けられてゐた。理事長は佐藤一夫（範雄の長男）君で、理事に片島幸吉（管）、阪井永治（管）、濱田幾治郎（管）、古川隼人（叛）、内川律爾（中）、出川武親（叛）、と言ふ陣容や相當な働きを見せてゐたのぢやが、騒動起ると共に理事長の指導が狂乱し叛乱軍の別動隊に早變りしたと言ふ珍無類の歴史をもつとる。この早變りしたのが、全國で青年信徒大會を開いて、あたかも金光教本部と同系なるが如く僞裝してゐたのぢや。

多久岡山縣知事の休戦ラツパ

續金光教お家騒動の真相

斯うして、段々と戦線は擴大して來た。管長軍は豫期しない戦なるが故に常に不利な戦程を辿るに對し、雪崩ることゝ叛乱軍の猛勢は宣傳戦に陳情戦に至る所、至る地に優勢を見せた。

殊に叛乱軍の軍事行動は金光教本部に對立して岡山縣金光町にその聯合本部を設けたのみならず、更に文部省陳情と東都言論機關への誘導を兼ねて東京市神田區和泉橋の金光教東京教會へ

中央事務所を設け、是に中央委員長一、委員及書記若干名を据へて戦線の擴大に努め、畑一君などが、その中心勢力をなして、小林鎮、古川隼人、佐藤一雄、白神新一郎、近藤明道、長谷川雄次郎、和泉乙三、關口釣一君などの本部軍と對應して奮闘したのぢや。

しかも、叛乱軍中の一部では更に金光教々團肅正期成會、地方信徒有志團の別行動隊を組織し、臨時列車を以て本部に押し掛け、管長宅に到つて示威運動を開始した。尤も、これ等はその主謀者が叛乱軍と事を通じてゐるのみで、これに附和してゐる多くの信徒は、その事の如何を問ふなく、己むを得ず所屬主謀者の意のまゝになつてゐるに過ぎぬ。管長宅前に到つて、主謀者が

「もつと前へ進め。」

と言つても

「もう、勿体なうて進めぬ。」

「もつとそちらへ詰める。」

「いや此處には敷石がある、勿体なうて踏めぬ。」

と言ふ具合の者が實に多かつた。

問題は、なぜ？金光教本部幹部の八割が叛乱軍に關係し、而も教の長老たる佐藤範雄君や高橋正雄君などが、叛乱軍應援の奇怪行動を採つたと言はれるに至つたかぢや。是には深い理由がある。深い理由ではあるが、言へば無理もない理由なのぢや。

叛乱軍に關與した幹部は全部、副管長攝胤君の血縁者か、それに近きものばかりぢや、昔から良くある血ゆえに大義を捨てた連中なのぢや、攝胤關係を見ると。

即ち小林鎮君は從弟、古川隼人君は小林君の弟で同じく攝胤君の從弟、佐藤一雄君、佐藤博敏君は共に佐藤範雄の息で攝胤君の義弟、白神新一郎君は攝胤の實娘の婿、近藤明道君は實弟、佐藤金造君は攝胤君の娘を養女に、關口鈞一君は近藤と血縁、金光三代太郎君は攝胤君の實弟、出川武親君は佐藤金造君の養女を妻に、しかも佐藤範雄君の長女喜久子は胤攝君の後妻となつとる。これに依つて、宿老佐藤範雄君がその晩年をあたたら叛乱軍の後援者として傷けたのぢや。斯う言へば、理由が良く判るぢやらう。

兩軍の激戦は多久知事の仲裁乗り出した依つて休戦状態となつた。仲裁は一應奏効したが、この仲裁不完備が、やがて再び金光教第二次戦を展開せすと、斷言出來ぬ原因を茲に孕胎するに到

つた、それについては後で述べやう。

唯、多久知事に依つて實戦は收拾されたが、つゞいて管長家邦君を妾腹と言ひ、弟正家君を妾腹と主張する「身分確認訴訟」が叛乱軍の古川隼人君に依つて提訴されたが、この結果は、去る三月、ついでに負けたのかも知れんが叛乱軍の負けで、叛乱軍は一から十まで負け通した。これだけ負けやうと思へば、負けるにも相當骨が折れるぞ。

全く調停の性質を具へぬ

岡山縣知事の仲裁案

愚老も、短い間ではあつたが、それでも十年近う新聞人として東京の眞ン中で飯を喰ふて來た。内閣總理大臣官邸詰の記者をしとつたこともあるし、内務省や文部省、それに陸軍省や海軍省にもよく行つた。

その頃、いまの岡山縣知事多久安信君は、青森縣だつたか喃、東北地方の知事をしとつた。あの有名な東北六縣の大饑饉のときも、秋田の武部知事と一緒に、東北救済を叫んで、現地民を安

心させたと言ふので、現地の評判は勿論内務省あたりでも、實に人氣のいゝ知事として鳴をつた。ところが、岡山へ行つて、金光教問題に手を染めたと言ふのを聞いて、愚老は金光教のためはた多久君のため仲正な仲裁が出来ればいゝがと希ふとつた。それにも拘はらず、愚老たちの耳に達したものは、不公平極まる調停に依つて、仲裁を無理強ひしたなど、言ふ噂が頻々として傳はり、多久君の人氣は餘り香はしくなくなつた。

一體、ものゝ仲裁や調停をしやうと思へば、兩者の言ひ分を良う聞かねばならん。ことの實や情狀を確めて掛らなければならん。それが定石ぢや。それを多久君はやつたのか、やらなかつたのか知れんが、結果は一方の方ばかりを聞き届けて、一方の方は全く無視された格好ぢや、事件の當時副管長派は、多久知事のもとに日參して、捏造した事實とやらを披瀝して管長排斥の口實をまくしたてたが、管長の方は一言の陳情もしなければ、反訴もしなかつた。平然として知事のご機嫌などは伺はなかつたものぢや。嘘でも百ペン言へば誠らしうなる。嘘を眞と信じた知事であるとは言はぬが、仲裁の結果は、どうもその嘘が通つたらしいのぢや。

殊に、その頃さる宮殿下が岡山へ近くお出でになると云ふことがあつた。多久知事は若し、御

來岡になつた宮殿下に騒いでゐる金光教事件について、と角ご心配をお掛けしては申譯かない。御來岡になるまでには是非調停して終はねばならんと考へ、短時日の間に多少無理のあつた仲裁案を押しつけたと言ふ噂が岡山でも東京にでも濃厚にある。

殊に、調停にさきたつて四月十一日多久知事と管長と會談した際に、覺書として取り交はされたものゝ内容が、全く仲裁者としての性質を完缺しとる。即ち覺書といふのは、

- 一、金光文孝教監は四月十三日までに之を解職すること。
- 二、佐藤宿老の榮梅辭退書は四月十三日以内に返却すること。
- 三、後任内局の組織に就ては佐藤宿老の意見を徵し之を行ふこと。
- 四、金光教改革に就き文部省に於て指示せる事項は新内局の成立を待ち速に其の實體案を樹立すること。
- 五、人格上非難ある人物は教務に關與せしめざることを。
- 六、昭和十年四月七日附諭告及通牒に因る人事に關する處分は之を行はざること。
- 七、前記の事項は管長に於いて速に誠意を以て解決に當り其の實現至難なる場合は責を負ひ職を

辭すべきこと。(以上叛亂軍機關誌金光教青年昭和十年四月號に依る)

是を見て誰しも嘔然とするぢやらう。あいた口が塞がらんよ。これが調停だの、仲裁だの言ふとる人間が、出される脅書とは夢にも想はれん。そうぢやあないか、

一、は、まあそれでいゝとして。

二、の佐藤宿老の榮稱云々ぢやが。一般では佐藤宿老は宿老といふ榮稱を管長に拜辭したと言ふとる。副管長派などでは、それを一生縣命に放送しとるが。あれは全くデマぢや。嘘ぢや。榮稱など拜辭したことは更ら更らないのぢや。榮稱拜辭は誰にしたかと言ふと、管長にしたのである。そんなら管長は拜辭を受附けたかと言ふと、管長は受附けてゐないのぢや。受附けんのに拜辭する譯がないぢやないか。これも知事の事實調査に對する粗洩ぢや。

三、の後任内局についての問題ぢやが。これがまた極めて當を失しとる、騒いだのちに圓く收めやうとする後の内局に、一方の騒動の眞中にあつた人物の意見を徵するなど、言ふことは、決して仲裁の性質を有つとる人間のやるべきことではない。佐藤宿老の箱の浦事件(筆者註佐藤宿老の人格のために發表を差し控へる)を知事は知らんから、知事は宿老を盲信したのぢやらう。

五、の問題ぢやが、これが一番いかん。人格上に非難のある人物を教務に關與させぬと、言ひながら、いま教務に關與しとる人物はどうぢや。多年の恩義を無視して非人道的にも思主管長に管長排斥といふ矢を引き、人格上全く排除した人物が極めて多いぢやあないか。

七、の問題ぢやが、これに至つて言語同斷ぢやぞ、管長の辭職云々を云ふとる。管長を辭めさせることは、金光教を破壊することぢや。金光教を倒すことぢや、そうぢやあないか、管長の地位は知事が云々せんでも金光教々規と言ふ憲法にちやんと記してゐる。一國の憲法を無視するが如きことが出来んと共に、小さいと雖も金光教にとつては憲法ぢや、それを、例にも無視したやうな態度を以て仲裁にのぞんだと云ふに至つて、吾輩何をか言はんやぢや喃。そうだ、金光教規を言へば、騒動中叛亂軍は盛んにその改廢を叫んでゐた。何故ならば、教規中に管長の身分が保證されとる。即ち「管長たるものは金光本家(攝胤君はお氣の毒ながら分家ぢや)男子これを世襲する」とな、これがあつては、副管長の椅子に乘らせられん。金光教規は金光教の憲法ぢやから喃。しかも、仲裁案中叛亂軍の始末について、一言もないなど出駄羅目も甚だしい。恐らくこの離停は多久君の官界生活の終始を通じ、最も遺憾なる結果を齎らしたもの、一つぢやと言ふことと、

出来やう。

騒動に躍つた兩軍表裏の人物

管長軍と叛乱軍(副管長軍)

管長軍

管長軍とは、とりもなほさず無勢よく叛乱軍を封じ、目的の前に手段を撰ばぬ烏合ながらも大勢の叛乱軍をして一步もその目的「管長排斥」に近か寄らしめなかつた殊勳甲を有つものちや、叛乱軍中には、金光教唯一の宿老佐藤範雄君が居り、策士高橋正雄君など言ふお歴々が揃ひも揃つて居つた。それのに叛乱軍の戦績は觀て居る方が氣の毒ぢやつた。横綱に田舎相撲が結んだやうなもので、立たぬ先に勝負が判つとつた。「管長排斥」の掛聲で、叛乱軍が立ち上ると四ツに組まぬうちに、もう轉んで居つた。そこで「俺たちは負けたのぢや」言ふてアツサリ土俵を下りれば、勝負は男らしいのぢやが、どうも負けて悔しい見え、叛乱軍は土俵を下りるやうな格好をしながら横綱の後へ廻つて突ツ飛ばさうとしたが……ハハハ……その突ツ飛ばしが「金光正家の身分訴訟ぢや」家が管長をどうしても辭めさせやうとして、家邦は妾の兒で

その弟の正家が本妻の兒ぢや、それだから管長には正家になるのが本當ぢやと言ふ訴訟ぢや。ところが、その突ツ飛ばしも、偉いものぢや、流石は横綱でビクともしなかつた。手を換へ品を變へて田舎相撲の叛乱軍はきたない戦争をやつたが、結果は皆んなの知つとる通り、いや、もう叛徒の汚名を着ただけぢや。なに？「昔なら腹を切らねばならぬが、今は昭和の世ぢやで腹を切らず助かつた」と叛乱軍の心あるものが言ふとるてハハハ……。心の腹を切れツ！と教へてやれ。尤も腹を切ることを知るぐらいの連中なら、叛旗を翻すと言ふやうな大馬鹿はせぬが喃。ハハハ……。

金光文孝君

……管長の弟ぢや。世の中ぢやあ賢兄愚弟と言ふことがあるが、文孝君に關する限り愚弟ぢやない。管長軍の參謀長ぢやつた。智膽縦横に良う戦つて來た。叛乱軍が如何に烏とは言ひながら、何分數が多かつたで喃。ガア／＼鳴くのを聞くだけでも相當五月蠅さかつたらう。文部省あたりでは非常に人氣が好い。問題は叛乱軍に對する處斷方法ぢや。銃殺がえ、叛亂に銃殺は付きものぢや、徒に優柔な處斷をとることは金光教のために禁物ぢや。

濱田幾治郎君

……佐藤金光中學校長の引責が近いと噂されてゐる。まさか排斥運動に追ひ

たてられて辭める愚は、賢明なる佐藤校長に關する限りせぬだらう。次代校長として濱田君あたりは、落着くのが適當だらう。管長に味方するとか副管長に味方するとか言ふことに超然として、唯正義な道を踏むと言ふ信念だけで動いて來た男ぢやそうな。洋行もしたことがあり、早稻田大學あたりから講師にと引ッ張りに來ても、母校金光中學を愛するが故に、中學校の一教諭を以て平然としとる快男子ぢや。

金光義忠君 ……管長軍の人なるが故に、昭和十年七月佐藤校長に依つて誅首された。校主に味方するが故に、校主の雇用人校長に誅首されたと言ふ哀話を持つとる。しかも誅首理由が、「老朽の故を以て」だそうぢや。老朽と言へば、まだ〳〵老朽の連中があると想つてゐたが喃。

其 他 ……今田周吉君、片岡次郎君、片島幸吉君、吉永甚太郎君、宮本嘉一郎君、松井達君、多田踏次郎君、阪井永治君。

叛乱軍 お家横領しやうなど、言ふことは昔でも仲々六ヶ敷かつたものぢや。それが昭和の聖代に、いや、飛んでもない話ぢや。叛乱の大きな近い例が東京にあるぢやあないか、叛乱軍たる副管長派は、まあ一度東京に來て東京の本物を見た人間の言ふことをよく聞くんぢや喃。

愚老のところへ來い。も少し世の中を勉強しなければ駄目ぢや。大谷あたりに煙ぶつてゐるからロクなことは考へんハハハ……。ヨ一言ふとる小人閑居とやら喃ハハハ……。

大谷あたりの地下を右往左往したんぢやア、同じ叛乱でも藝當が汚い。しかも狙ふた管長の椅子は動かないし、動いたのは運動資金ばかりで、姦しばらく副管長派もご愁傷さまぢや、まあ、首でも洗ふて、次に來るのがナンマイダア……、尤も神式ならハハハ……ナンマイダアでもあるまいが喃。是からは氣をつけて、決して人の椅子を横領しやうなど、犬と猫がするやうな事はしない方がいゝ。そんな事に費ふ金があつたら、社會事業にでも投げ出しとくのぢや喃、前惡の罪ほろぼしにさ。

佐藤範雄(宿老)君 ……前金光中學校長として筆者には恩師につき、自ら筆誅することは差控へる。唯、晩年を自らの輕擧に依り深徳深望を傷けられたこと併びに、是が爲金光中學の名譽を傷けられしを遺憾とせざるを得ん。軛の浦事件と共に貴下には今次再度の輕擧であらう。御領に謹慎の由、當然の事とは言ひながら、御氣毒なことぢや。

高橋正雄君 ……いまの金光教の教監(首相)ぢや。金光教青年の三月號に「青年會員に寄

す」と言ふ。名題のもとに迷論を寄せとる。その迷論の故に、全國から問責されとると言ふ。責める價值のないものを責めるのは、責める方が悪いぢやあないか。なぜ責める價值がないかて？ そうぢやあないか、騒動のときは、あれほど管長に叛逆しながら、こと收まると平氣で管下に來り一飯を喜々として喰ふとる。愚老などには出來ん藝當ぢや。高橋君などは、神がかつとるのか動物がかつとるのか、あゝ言ふ道德とか義理とか人情とかは判らんらしい。人間も、こゝまで來ると脅ろしいものはなかるう。金光教青年三月號の記事内容か？、あゝそれは、騒動時分金光教青年會が、管長に叛逆した戦ひ振りを賞めとるのぢや。それは、無茶ぢやと言ふのか？、ハハハ……、それだから高橋君は神がかつとるか動物がかつとるか、どつちかぢやと言ふのさ。

佐藤金造君……現金光中學校長にして筆者には恩師ぢや。校主に對し叛行したことについては校友共に激憤に堪へんが、筆誅は遠慮する。谷天頼君著「水に画く」に依れば、佐藤君の住居は叛亂副管長軍の參謀本部たりし（同著十六頁上載）とのこと、奇怪の限りぢや。校長は管長（校主）の一雇用人に過ぎん、古今東西下僕の主に叛するを時に見るとは言へ、身に教育家たるものゝ主に叛逆するは、愚老の未だ聞かぬところぢや、道德的の觀念からして、過去の瀆罪のた

め既に校長の椅子を去られてゐる事と思ふ。當然のことぢや。母校金光中學校史に一大汚點を印された不明は過去のこと故に、悔いても仕方がないが、更に將來の子弟教育などに貴下が當ることとは實に危険事と言はんければならん。

出川武親君……金光中學校元教諭にして筆者の先生ぢやつた。斯う言ふ風に、子弟教養に當り當つてゐた多くの人物が行路を誤つて叛逆軍に加つとる。過去の教化を省みて冷汗三斗ぢや殊に修身の講義や漢文、國語の先生の中に叛亂者が多いのぢやから、いや困つたものぢや。愚老などは修身や漢文や國語は中學一年生から、いま勉強し直しとる。危ぶなしくて喃ハハハ……：叛亂精神が少しでも體に流れてはゐないかと思ふて、昨日も中學校時分の憶出の服を行季から引ッ張り出して蟲干したほどぢや、來合せて居つた金中時分の同窓の高田君が、吾輩も歸る！と言ふから、

「どうしたんだ」

と聞いたたら、

「吾輩は洋服はないが帽子があるからクリーニングに出すのぢや」

そう言ふて出来上つた晝飯も喰はずに歸つた。同じやうに筆誅は遠慮する。叛乱軍の参謀格ぢや喃。「それでは叛乱軍の参謀長は誰か」さて愚老もハツキリ知らんが、世傳へて佐藤金造君と言ふとる。まさか、これは信じられんが喃。

佐藤一徳君……佐藤金造君のたつた一粒ダネ。まだ右も左も判らんくらい若い方ぢや。親爺と同じやうに、副管長のために相當働いたが喃。しかし、まだく若いで喃、働いた割合に結果はサツパリ駄目ぢや。或る校友が、親爺の校長を訪ねて、

「貴方はどうして校主に刃を向けましたか」

と問責したが、何も證據のないことぢや、

「飛んでもない、わしが何時校主に叛いた？馬鹿な！」

威猛かくなつて逆襲した。そこで校友は、

「校長は假に反逆しないとしても、貴下はなぜ、たつた一粒種の一徳君の教育が出来なかつたのですか」

と暗に一徳の叛逆行動を指したら、校長は蒼くなつたそうぢや。その頃一徳君は盛んに縁の下の

力持ちをやつとつた頃で喃。

古川隼人君……管長の弟正家を蹴らして、家邦君を管長の椅子から離すために「身分訴訟」を起した張本人であり、且つ目茶々に敗惨した張本人でもあるのぢや。

佐藤一夫君……佐藤範雄君の子ぢや。一夫君の息とは、愚老同年級ぢやつた。そんな譯で此の入物はよく知つとる。もう良い歳になつとるぢやらうが、クル／＼目の丸い顔をした面白い親爺ぢやつたが喃。叛乱軍の闘士で、管長下の金光教青年會の理事長をやつて居つたが、教内に騒動が起るに及んで、馬首を變へ金光教青年會を叛乱軍に組み入れた男ぢや。今度の東京の×××××とよく似とるぢやあないか。

其 他……小林鎮君、白神新一郎君、近藤明道君、畑一君、和泉乙三君、關口釣一君、佐藤博敏君、金光三代太郎君、金光國開君、金光守道君、竹部慶男君、竹部壽夫君、藤井新君。

金光教管長金光家邦君の人物

果して一教統領の器を有ふか

管長攻撃組の叛乱軍では、管長不信任の理由として、次の二つを掲げとるやうぢや。

- 一、管長金光家邦の人格、徳望の缺除。
- 一、管長金光家邦の教政に對する無能。

具体的に言へば「管長横暴」「本殿造營問題」「教内機構の改革」「サイ錢配分方法」など、無數ぢやが、結局するところは、いま言ふた二點に歸入するんぢや。二點のうち、後者の場合は措て藉いて、前者の點に於て果して金光家邦に管長としての人格或は徳望がない場合は、理論的に當然管長としての椅子を離れるべきぢやらう。しかし後者の「管長の教政に對する無能」は金光家邦君をして毫も退位の理由を形成しないぞ。そうぢやあないか管長が、假に教政に無能な管長だとしても、それは悉くが管長の責任ではないぢやらう。輔佐宜しからざるが故に、その無能な結果が現はれるのぢや。管長が教政に當るからと言ふて、管長がなにも金光教務を一から十まで司る譯ぢやあない。仕事は參謀長まかせぢや、管長は責任上の決裁をやるだけぢや。

廣田内閣が組織されて間もなく、内閣は施政方針を發表した。その中に「今までの内閣の治政ぶりは税政百出してゐる」と言ふ意味の事を言ふて、廣田は社會の憤笑を買ふた。何が税政百出

ぢや、大きな顔で廣田は聲明をしとるが、その本尊の廣田は今迄外務大臣として三、四年もその税政をやつて來た内閣にゐたのではないか。今までの内閣が云々とは飛んでもない！廣田は自ら墓穴を掘つたが、自ら墓穴を掘つたのは廣田首相許りではない。副管長派御一統全部も、似たり寄つたりぢや。ろく／＼管長を輔佐しないで、管長の教政はどうの斯うの、言へた義理ではない。武士であつたら、先づ腹を切つて「殿が悪いのではない臣が悪いのでござる」身を以て諫するぐらいの忠誠と義理は知つとる。神様に仕へる身など、平常は大きな夢見た様な事を言ふとるが、何はさて神を荷いで一賭け仕様うとする連中の多いこの世故、いや義理も人情もあつたものではないぞ。尤も副管長派の連中が斯の類ぢやと言ふ譯ぢやあないが喃ハハハ……………。

話は元へ戻るが、果して副管長派の主唱するがやうに、
一、……金光家邦の人格、徳望の缺除。
の非難が、金光家邦君に中るぢやらうか。その結論はさて藉いて斯う言ふ話を、愚老は聞いたことがある。

愚老の友人でな、東京×日新聞に勤めてゐる男で名取圭三君と言ふ熱情漢が居る。やつぱり岡山

の生れで、金光に近い。あの金光教の騒動中は實に金光教のために活躍したものでちや。斯の騒動は管長の方が正しいと信念を抱くと自分のゐる新聞は勿論のこと他の新聞でも彼の信念より遠ふことを書けば、同じ記者仲間のことちや「其處は斯う書かんければいかん」と言ふて説き廻つたものちや。ところが、騒動も多久岡山縣知事の調停で、不満ながら管長の身分は安固と仲裁された。それを聞いた夜名取君は、愚老の老屋にやつて来て、嬉し涙を浮べながら、乾盃ちや／＼と言ふて提げたウイスキーを、あの童顔を眞赤にするまで熾んにあふつたものでちや、ところがそれから十日許りして、わが愛すべき名取君がまたやつて来たんちや。しかし、今度の名取君は全く生氣がない。

「一體どうしたんちや」

と愚老が聞くと、

「見込み違ひちやつた。管長と言ふ男は、も少しは人格者かと思ふとつた。そして續いて彼は、

「實はこの間来た翌日、急に下關へ特派されることになつた。金光は丁度その中途になる、往く

路では寄れないが或は復路は立ち寄ることが出来るかも知れんと想ふたので突差に行つたのでは失禮だと思ふたから管長の所へ、お喜びを述べかた／＼お寄りすると言ふて、東京を出發の前手紙を差し出して置いた。ところが復路にうまい具合に時間があつたので、管長の宅を訪れた。管長は喜んで迎へ會ひ心からお禮の一言も言ふかと想ふたら、お禮どころか、召使ひ風の者に胡散臭さく扱はれた」と言ふのである。非常に憤慨して、「なんだ管長なんて今少しは人物が出来るとるかと思ふたに、全く飽された。如何に報導するのが自分の仕事とは言ひ乍ら、他社までも驅けめぐつて、管長のために正導してやつた。管長はその事を良く知つとる筈ちや。わざ／＼二百里を訪れたのではないか、管長にして禮の一言ぐらひは言ふ術を知つてゐても好いだらう。あれでは人格的に管長としての資格が疑はれる」名取君は非常に怒つてゐたが、

「まあ待て、一事を以て万事を想像することは早計ちや」

と言ふて愚老は、名取君の不愉快を止めた。偉いと言ふ人物になると仲々人には會はぬものちや。偉いと言はれる型の人物でも本當に偉いのと、本當に偉くない二通りがある。本當に偉い人間になると、會ひ遊ぶると言ふのも一つの事實ちやが、忙しくて會ふ暇のないのが多い。本當に

は偉くはないが偉く見せ掛けてゐる人間は、會はれると箔が落ちる。暇があるなしより、それで會ふのを嫌ふのぢや。管長は前者の方だらう。

とに角、今度の騒動で叛旗を翻した副管長の脱線至極はさて藉いて、管長も勿論身の不徳を謹慎しなければならん。聞けば騒動以來家に閉じ籠り、只管讀書三昧、謹慎の意を表してゐられるそうぢや。それが偽名取君にも會はなかつたらしい。それを傳へ聞いて名取君も幾分心を安んじとる。

家邦管長が非常に偉いと愚老に想はせたのはあの騒動中、叛乱軍が捏造した宣傳を善良な信者に撒き、管長を罵謗してゐる最中、それを見るに見兼ねた連中が、せめて叛乱軍の幹部だけでも金光から追放して下さい。」と嘆願しても、管長は「いや、いかん。天が下には他人がないのぢや今に皆歸り伏するぢやらう。」と言ふ、全く叛乱の叛乱軍に一指を染めなかつた慈心には、流石に愚老も頭が下つた。丁度この間の香椎司令官のときと同じやうぢやあないか。ところが、管長の言ふたのと少しも違はなかつた。騒動が鎮まると、一兵も残さず叛徒は歸伏し、金光家邦管長下に嬉々言して御飯を頂いとる。

「義理や徳義を知つて、その御飯が食べられますまい」と言ふのか。一體義理や人情や徳義を辨まへてゐて、叛逆などが出来るかハハハ……。

果して生神として疑なきか

福管長金光攝胤君の人物

「生神さまぢやと言はれとる副管長金光攝胤君の人物について語つて呉れ」と言ふのか……。
うむ！、それは面白いかも知れん。この間、愚老を訪ねて來た信者の中で、談たま／＼攝胤君のことに及んだら。

「あれ！勿体ない！」

言ふて、語るを遠慮しとつた。何も遠慮することはない。攝胤君が、まさか神様ぢやあなからう。假に宣傳するやうに神様であつても、人道に逆き、人倫に外れる事をするやうなもの、神様の中でも惡の神様ぢや。大本教の教祖は「なほ」と言ふ老嫗ぢや。生きてゐる時分から生神様やと信者に言はれてゐたが、あれは實際は狂乱女ぢやつた。大本教がそうだから、必ず金光教が

そうだとはいはぬ。しかし、信仰と言ふものは、生きてゐるものでも死んでゐるものでも、とに角その目標をかねばならぬ。金光教が信者の信仰目標を造るために攝胤君を生神にしたと見るのが普通ぢやあないか。

「そうかも知れません」

と言ふのか。適らずとも遠からずぢや。ほんたうの生神なら、なにも叛乱軍（副管長軍）に引き荷ぎ廻されて、ハイ、負けてござんしたと凡夫の生き恥などは曝らしもすまいし、第一喧嘩や叛徒の渦中に入るやうな愚かはせんわい。こゝ等あたりには、ちやんと生神にして生神にあらざる證據が歴然とあらう。諸君など、將來生神呼ばわりはせぬこと、神を濫用してゐると本當の神様が怒るぞ。

それに比べると、東郷平八郎元帥などは偉かつた。攝胤君などと較べては元帥に勿体ないが喃元帥は死んで神に祭られたが、生きてゐられる間は攝胤君のやうに器用でもなく、神様にはお成りにならなかつた。神様のやうな、徳を湛へてゐられながら神様でなかつた元帥と、普通の人間が顔負するやうな……そうぢやあないか、三年越しも喧嘩をするやうな人物ぢやあないか……

……徳を有ちながら生神である者と、斯うなると一寸世は逆ぢや喃そうかも知れん、當世は娘などダンバツといふ頭の髪をチョン切るそうぢや。女が男のやうな格好をする不可思議珍妙な社會ぢや故に、神様より普通の人間が偉いやうになつたのかも知れん。

その東郷元帥に愚老も一度お目に掛つたことがあるが喃。あゝ立派な方ぢや。

「攝胤君より立派ぢやらう」

と言ふのか。ハハハ……いや攝胤君の方が立派かも知れんぞハハハ……。金があるだけ喃丁度ロンドン會議が日英米の間に行はれてゐる時分ぢや。一九三〇年と言へば、今から六年の昔當時海軍はロンドン條約を結んで好いと言ふものと、結ぶ事には反對ぢやと言ふ二つの派があつた。當時も元帥は毅然として海軍の元老でゐられた。どうかして、自派の主張へ元帥を導かうと兩派で元帥は引ッ張り凧になつた。有名な話ぢや。ところが元帥は、どちらにも加擔されなかつた見上げたものぢや。紛争の渦中に捲き込まれた大將や中將は非常に多かつた。いや、多かつたのではなくて全部だつた。ところが、元帥は泰然中庸を歩まれてゐた。

生きてゐられる間はまだ神でなかつた元帥の毅然さが、生きて神である攝胤君に萬分の一でも

あつたら、今度の金光教大騒動は起らなかつたであらうと、斯うまで生神の値下りはしなかつたらう。君の問ふ、

「生神君の人物は」

神としては零、通常の人間としてなら中以下と言ふところに落着くのぢやあないか喃。

昔日の名聲いまは無き學園を救へ

今次騒動の渦中に、き込まれた金光中學校

「思想黨化の樂園であらねばならぬ金光中學校人事に、幾多の曇々たる悲惨事が、今日まで織りなされて來たと言ふのか。」

そうか、愚老それは初耳ぢや、事實とすれば由々敷き大事ぢや喃。君が言ふ「金光中學校の悪人事」を、なにも君が愚老の前に、嘘を言ふてゐると言ふのではないが、出来る限り嘘であつて貰ひたい。嘘で無うても、一片の流説であり、一微の誤解であつて欲しい！

昔から人事は六ヶ敷いものとされてゐる。今は現役を離れとるが、名將の名を擅にした財部

海軍大將—財部と言ふ人間は喃、海軍中で臣下としては一番出世の早かつた男ぢや—その財部でさへ、「一番面倒なのは人事ぢやわい」と心底を吐露なさしめたほど、人事は何時、何處の世にも難物とされとる。金光教一門が精魂をこめて、その經育に努力してゐる金光中學校の人事にも、多少の非難は己むを得ないぢやあないか。

「なに？……。そんな生柔さしい非難ぢやあない」

君が、愚老に語らんとする金光中學校人事の非難は、そんなに大きなものなのか？……。私黨私閥に立脚した醜惡極まる悪人事が、學園金光中學校に瀾漫し切つとると言ふのか。往年三備（備前、備中、備後）に名聲、その名を成した私學金光中學校の校風は、いま廢屠の姿に等しく醜惡なる悪人事に禍されて、一路に寂滅の行途を歩んでゐると言ふのか。

神聖なるべき學園に、假にも私黨、私閥の存在が許されるものではない。それが、私黨、私閥の故に人事が禍されるに到つて、事は寧ろ言語同斷に屬する。

「悪人事の犠牲になつたものとして、先づ第一に教頭の高橋文五郎先生を擧げなければなりません」

と言ふのか、うん、そうか、そう言へば高橋先生の辭職を二年ほど前に、愚老も聞いた。デツブリ肥つた、六尺近い強さうに見へる先生だつたが、掛けてゐる金縁の眼鏡が余りに小さいので、その對象が、丁度象に似てゐるので、愚老たちも誠に恐縮だつたが、象の尊稱を奉つて居つた。いや、中學時分と來たら腕白者ばかりで喃、中にも茶目な連中になると、學校へ勉強に來るのか先生の尊稱を附けに來るのか、判らん位で、新しい先生などが赴任されると、講堂で挨拶をするのが恒例だつた。今度來たと言ふのは、どんな先生だらうか全生徒は講堂に積み込まれてガヤ／＼騒ぎながらも、職員の出入口を注視してゐると、校長に案内されて新先生が入つて來る、尊稱を附ける方で敏感な連中は、この時一見見ると、すでに會心の笑を洩らしてゐる。これなんかは斯の道にかけては天才である。が、勉強に於ける天才は自ら別ちやろう。校長が紹介すると、新しい先生が赴任の辭を述べる。挨拶が終つて新先生が降壇する頃には、彼方でも此方でも先生のニツク・ネームが出來上つとる。そして、その多くの中から最も優秀なものが、たつた一つ選定され末代に傳へられるのちや。尤も高橋先生の尊稱は、高橋先生が赴任された時分からのもので、愚老などが入學した時は、高橋先生十五ヶ年勤続表彰式が行はれたぐらいであるから、勿論

先輩生徒からの繼續事業？だつた譯さ。大變に、話が横道に外れた様ぢや喃。高橋先生は英語の先生だつた。實にウマイもので、發音などは毛唐そのけであつたし、頭の良いことも有名で、教授のときなども何も持たないで手ブラで教壇へ上つて來る。始めのうちは、本を忘れたのぢやなあと想つとると、そうぢやあない！。

「何頁を開けて」

生徒が今日教はるところを開けると、

「今日は俺が讀むから皆んな良う聞いとれッ」

そう言ふて二頁でも三頁でも平氣ぢや。茶目な生徒になると、先生の讀み違ひを發見しやうと想ふて眼を皿のやうにしとるが、一綴一字も間違はなかつた。その高橋先生が、金光中學校惡人の犠牲となつて、骸首の鬼行に遭ふたのぢや。「高橋の前後に高橋なし」と言ふて職員生徒共は相抱いて涙を流したと言ふ尤もなことぢや。いま時分まで奉職されてゐれば、校長は間違ひなかつたらう。校長候補の教頭なるが故に骸首されたのか？。二十何年の金中生活を打ち切つて、病む胸を抱きながら故山薩摩に向つた高橋先生の姿は、切かに送別する人の袂を涕つたと、今に傳

へる木綿崎山哀話ぢや。

五二

つゞいて古浦恒吉(英語)先生の馘首は、その間の事情を知る人の限りに於て、等しく悪人事無定見人事の犠牲として同情を寄せられたが、更に越へて昨昭和十年七月金光教お家騒動の余波のため金光義忠(地理、農業)先生が老朽の故を以てバツサリ馘首されたことは、或は豫期された鬼行とは言へ、穏和な學園、徳澤な學園としての欣誇を傷けること甚だしく、廢頽する金光中學校の汚名に更に拍車するところとなつた。

犠牲となつた人の姿はまだく、とても枚舉に追がないほどある。すぐる昔、唯一の硬骨教諭友道憲二(漢文)先生が逐はるゝ身となつたのも、いづれも軌は同じぢや。一人々名を列ねては際限がない。殘餘の哀話については、日を改めて又語る日もあらう。

問題は、この悪人事の矯正ぢや。一日も速うその悪人事の禍根を絶ち、名聲落つること甚だし金光中學校をして、昔日の勢威に還すことが一番肝要ぢや。果して禍根は何處にあるか?……禍根は人事を總攬するものゝ上にあるのぢや。しからば人事を總攬するものは管長か。然らず、管長に非らず、金光中學校は、金光教にとつては別格ぢや、一ヶ年約二萬圓に近い金が金光

教から金光中學校に補填されるとは言ひ乍ら、その學校行政は殆んど金光中學校長の掌握するところとなつとる。全くの治外法權ぢや、金光教職員は金光中學校へは手出しが出来ぬ現状ぢや。しかし、管長には校長を任免する權能がある筈ぢや。だが紊亂、腐敗のドン底に陥ちてゐる金光教で、管長はそれさへ氣儘には出来ん今日この頃ぢや。殊に、校長佐藤金造君の後には、教内での權力者宿老佐藤範雄君が控へてゐる。斯くして學園の香氣は日を追ふて廢れ行くのぢや。何時かは、泣いても歸らぬ日が金光中學校の上に舞ひ來たらねば幸ぢやが喃。

さて、金光教の運命は?

今まで述べて來たところで、金光教を危篤に陥れた金光教お家騒動はよく判つたことぢやろうと想ふ。問題の騒動が去る三月「身分訴訟問題の判決」を期に終焉した許りのけふ今日、また金光教が危機だとは解し兼ねると言はれるかも知れん。しかし、漸く靜穩を迎へんとした其の金光教の中に、再び大嵐を捲き起さんとする氣運が充分にあるのぢや。

五三

二度と將來に内紛すれば、或は金光教の認可は主務官廳に依つて取り消されるかも知れん。愚老などは、すでにして、生神の二字でさへも金光神のためには宜しくないときへ想ふる。人間を指し神様扱ひは感心出来ん。假に「生神」だと愚民愚夫をして惑はしめる奇策だと言はれて、果して是に満足な答辯をなし得る人が教内に幾人ぞあるか。認可取消が金光教の上に来らずと誰が斷言出来やう。再び將來に内紛の起る憂ひが無ければ、従つて認可の取消はあるまいが。ところが、近い未來に金光教は再び内紛の禍に遭ふ不幸な原因が充分あるのぢや。認可取消の起るのは此の點ぢや。認可取消は金光教の落命と同然！、これを呼んで愚老は金光教の危機來！と言ふのぢや。誰ぞ異存があるか……。

「しからば、内紛再燃の原因」を語れと言ふのか、問題は其處に行くのが當然ぢや喃。

先づ見よ！。一千の教會を動員し、數万の戦費を犠牲とし、且つ目的の前に手段を選ばなかつた金光教幹部八割を主體とする叛乱軍が、昭和九年の二月から昭和十一年三月の三ヶ年に亘る戦争の間、目的何の一つも貫徹することのなかつた叛乱軍が、この儘、果して頭を垂れて終ふだけの徳操があるかどうか、これは極めて問題ぢや。悪かつた事を悔いて家邦管長の下に平伏して金

光教再建に努力するだけの徳操が、果して叛乱軍にあるか。恐らく、それだけの度量もなければ勇氣もあるまい。そうすれば、叛乱軍の再起は間違ひ無うなる。

しかも、一方管長軍では論功賞が話題に上つる。當然の事ぢや。殊に叛乱軍に對しては十分の叱罰が必要ぢや。何時何處の世にも、悪いことをして罰せられぬものはない。三ツ兒でさへ、悪いことをすれば親に叱かられる。信仰の大本山金光教に叱罰が無うてどうする？。

「叛乱再起の時期か」明日明後日と言ふ譯にも行くまいが、余り遠い日の事でもあるまい。この論功行賞の後が一番危険ぢやろう。「戦績が氣になる」と言ふのか。前には宣傳が上手だつた故で、副管長派たる叛乱軍は樂な戦争のやうだつたが、段々空宣傳が暴露すると苦戦になつた。今度の戦争では、一般大衆は勿論のこと、信者も副管長派の捏造宣傳に、そう度々は乗るまい。然し唐の昔から「背水の陣」といふ訓がある。今度叛旗を押したてるとすれば、副管長派は恐らく命を賭してやるぢやろう。命を投げると、偉いものぢや相當強くなる。力にも死力と言ふて、死を賭したときは神力が出る。それと同じぢや。

「内紛は再發しないで済まされまいか」うむ！、それが一番願はしいことぢや喃。度々前にも言

ふた様に、副管長派が戦を起すと言へば仕様がな。まだく管長の椅子を狙ふとるから喃。この危機を切り抜けに、愚老に一つの名策がある。

「必ず内紛の再發を回避することが出来ますか」

勿論ぢや。

「その策を教へて呉れ」

と言ふのか。いゝ種だから相當高くなければ賣らない積りぢやが、他ならん貴公の事ぢや、教へやう。策とはな、

「管長の椅子を二つにすることさハハハハハ……。」

(完)

昭和十一年四月十日 印刷
昭和十一年四月十五日 初版發行
昭和十一年四月十五日 再版發行

不許複製

昭和十一年四月十六日 三版發行
昭和十一年四月十七日 四版發行
昭和十一年四月廿五日 五版發行

危機に瀕す？ 金光の命運 附奥

著者 **を、しま・ひろし**

東京市麹町區飯田町一丁目二十三

發行者 **佐久間富彌**

印刷者 **佐久間富彌**

東京市麹町區飯田町一丁目二十三
印刷所 **時事研究社印刷部**

東京市麹町區飯田町一丁目二十三

發行所 **時事研究社**

東京市麹町區有樂町二丁目二

發賣元 **森田書房**

電話銀座四七一〇・四八二四番

定價十錢

但シ郵送希望
ハ郵税二錢要

愛讀者カード

感 後 讀	行刊などに次 かすでみ望おを	所住御	名姓御

愛讀者の皆様へ

- ◎ 上掲の愛讀者カードへ夫々御記入下さいまして、二錢切手開封で御送り下さい。
- ◎ 御手数でも文字は解り易く綺麗にお書き下さいまし。永く保存いたしたいと存じますので。
- ◎ 本カードに依つて新刊書を、その都度お知らせ致します。
- ◎ 御住所變更の場合は、御迷惑でも御一報下さい。

近刊



政党が

軍部が

官僚が

を、しま・ひろし著

時事研究社発行

終